企業名：応用地質（9755）

レポート名：2023 年統合報告書

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

応用地質が目指している将来の姿は、2023 年統合報告書によると“地球にかかわる総合コンサルタントとして地域社会に貢献するとともに独創的な技術により新しい市場を自ら創造できる企業”である。

「地球にかかわる総合コンサルタントとして地域社会に貢献するとともに」：現在会社として社会問題の解決や持続可能な社会の創造の手助けをすることを商品として提供しており、培ってきた技術と新しい技術を駆使して様々な環境の諸事項に関しての分析を行っているということが資料から読み取れる。資料内で紹介されている商品も、すべて環境問題やサステナビリティを意識しているため、地球にかかわる総合コンサルタントとして地域社会に貢献するということは十分に理解できるものである。

「独創的な技術により新しい市場を自ら創造できる企業」：今まで事業の公共性の高さから官公庁が顧客基盤の中核的存在となっていた状態から、DX の推進と長年培ってきた差別的技術を活用しながら売り物としてのソリューションサービスを提供することで新しい市場を創造しようとしている。このことから、独創的な技術により新しい市場を創造していくイメージが持てるため理解できる。

これらの理由から、応用地質が目指している将来の姿は理解できる。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

この会社の現在の競争優位性は DX と差別的技術力である。DX に関して、2023 年統合報告書によると“2022 年には、経済産業省、東京証券取引所及び（独）情報処理推進機構が共同で選定する「デジタルトランスフォーメーション銘柄（DX 銘柄）」にも選ばれました。”とわかる。資料内で同業界で DX のパイオニアであるという記述があったことからも、応用地質の持つ DX の技術は他社との違いを生み出している。特に、技術的差別化よりも、他社よりも安い価格でサービスを提供することを可能にしている点からコストパフォーマンスの差別化を可能にしている。差別的技術力は長年の経営で培ってきたものである。具体的には“地質学をはじめとする地球科学の知見と技術”（https://www.oyo.co.jp/corporate-profile/data/）である。

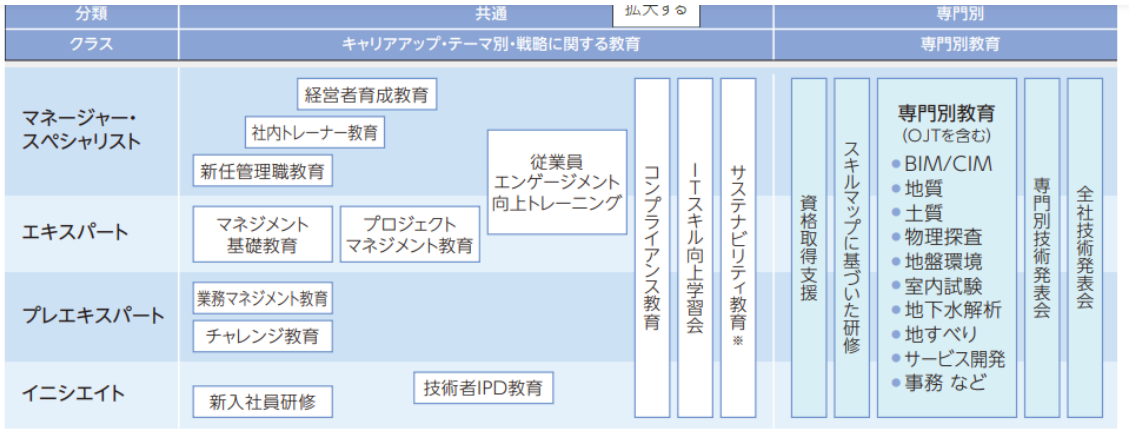
3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

DX と差別的技術力に関しては、持続性があるといえる。差別的技術力は長年の経営から培ったものであり、この能力を持っているのは社員である。DX に関しては企業ごとに投資をすることで発展させることができる可能性があるが、応用地理では DX と差別的技術を組み合わせることでより効率性が高くより精度が高い商品の提供を可能

にしているため、持続性はあるものと考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

可能だと考える。教育研修として、技術者 IPD 教育、社内トレーナー教育、アンコンシャスバイアス研修を行っている。加えて、人材マネジメントに関する基本的な考え方を人材育成方針としてまとめており、社員一人ひとりの個性・つよみ・適正などを踏まえたキャリア形成などのサポートを行っている。また、労働安全性を高め、事故リスクを軽減するために施策を講じている点、社員の健康を維持する健康経営体制を行っている点、働き方改革を行っている点から社員を大切にしていることがわかり、自身の人的資本の価値向上を達成できる環境が整っていると考えられる。



※SDGs、健康、環境、D&I、人権DD、エンゲージメント向上等ESGに関連する教育(コンプライアンスを除く)

▶2022年に実施した主な社員教育

分類		研修名	目的	対象者	参加者数(※)	研修時間
共通	キャリアアップ教育	経営者育成教育	次世代の経営幹部候補人材の育成	40~50歳代の経営幹部候補の管理職	20名	18時間
		マネジメント基礎教育	管理職候補者の能力向上	管理職候補者	39名	8時間
	テーマ別教育	社内トレーナー教育	社員教育推進役の育成	管理職以上の事業所の教育推進者	28名	10時間
		コンプライアンス教育	社員のコンプライアンス意識向上と不正行為防止	全社員		1時間程度
		サステナビリティ教育	社員のサステナビリティに対する理解促進	全社員		1時間程度
専門	専門別教育	スキルマップに基づいた研修	専門的スキルの向上	事業所ごとに実施		
		専門分野チームによる教育(OJT含む)	組織横断での専門的スキル向上と交流	専門分野ごとに実施		
		資格取得支援	業務に必要な資格取得	全社員		―

(応用地質　2023 年統合報告書より)

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

よかったところは、大切な部分を繰り返し、さまざまな文脈の中で紹介することで読み手にも大切なポイントを多角的に伝えることができている点である。一方、改善余地としては、おそらく冊子で印刷する用途のものをそのまま電子化してアップロードしている

と考えられるため、見開きで見ないと読みづらくなってしまう箇所がたくさんあったことがあげられる。また、繰り返し登場する用語はあらかじめ最初のほうに紹介をのせておくことでその後の内容がよりスムーズに読み手に伝わるようになると感じた。